キャンパス散歩

駒Ⅱ（コマツー）諸物探訪

藤森 照信
生産技術研究所　教授

旧航空研究所本館。

東大のキャンパスは、本郷、駒場、柏の三つに収束しつつあるが、駒場を二回に分けて散策してみよう。

駒場のキャンパスは、近年、駒場Ⅰ（ワン）、駒場Ⅱ（ツー）と呼ばれるようになっている。Ⅰは誰でもおなじみの教養学部のキャンパス。Ⅱは少し離れたところにある旧宇宙航空研究所の跡地で、現在は生産技術研究所、先端科学技術研究センター、国際・産学共同研究センターなど工学理学系の研究所が集う。その一画には国際学生寮も置かれている。

今回は、その駒Ⅱ（コマツー）キャンパスを歩いてみよう。

江戸時代には将軍の猟場であり、明治時代には農科大学（現・農学部）の農場が置かれ、関東大震災の後、航空研究所（後の宇宙航空研究所）が越中島から移ってきたというのがこの歴史だから、まず農場時代の名残りは何かないかと探してみた。農場だからあるとしたら樹だろうと目星をつけて一本一本を見てみたが、太さからしても航空研究所を建設した時のものばかり。

航空研究所になってからのものは数多いが、四つ紹介しよう。

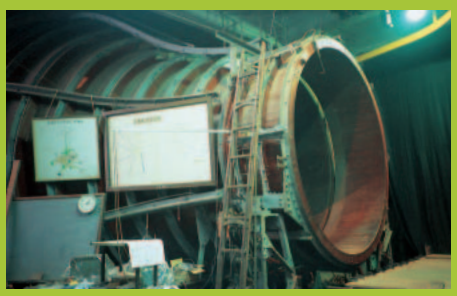
昭和五年までに完成した航空研究所の建設物のうち、建築デザイン的に見て興味深いのは、中心に立つ旧本館と右手の旧実験棟の二つで、本館は上すぼまりのドイツ表現派ふうの時計塔に特徴があり、水平性の強調された実験棟は、ドイツ表現派がモダニズムに変りはじめたちょうど過渡的デザインとして面白い。

本館の左手には風洞実験棟があり、外観は地味だが中には、飛行機研究を象徴する巨大な木造の風洞が残され、現在も使われている。とにかく大きい。そのうえ仕組みがよくわかり、とぐろを巻いた巨大なラッパといえばいいか。

本館の左手でもう一つ見逃せないのが、銅像。筋骨たくましい裸の青年が、左足一本で立ち、上半身を水平にねかせ、両手と右足を前後にピンと張るように伸ばすという珍しいポーズ。一見してスピードとか飛翔をイメージさせる。いったいどういう由諸なのだろう。近づいてみると、台座には、人物のレリーフが刻まれていて、斯波忠三郎先生とある。ハテ何者か。後ろに回ると、「航空研究所長東京帝国大学教授工学博士男爵斯波忠三郎先生記念　昭和十年四月建之」。大正十二年に航空研究所が開設された時の功労者にして駒場に移転した時の所長さんだった。

でもそれくらいの功績では男爵はもらえないから、「帝国大学出身名鑑」で調べて見ると、斯波家は加賀百万石の家老で一万石（大名相当）を領し、明治維新の時の功績で明治三三年に男爵を授けられていた。忠三郎先生は父の後をうけて男爵を継ぎ、大正六年からは貴族院議員もつとめている。先生の専門は船舶用のエンジンで、海軍大学校の教授もやっていた。男爵、エンジン、海軍、こういったファクターをバックに航空研究所の創立や移転に力をふるわれたということなのだろう。

ドイツ表現派風の時計台左右非対称がユニーク。


戦前における最大の風洞。なんと木製である。

木製巨大風洞の平面図。飛行機が描かれている。

航空研究所移転当時の所長を記念する像。